

Owenism における Utilitarianism の評価について

——思想史の方法にかんする若干の提言——

渡 辺 義 晴

I

19C初めイギリス産業革命期にあらわれた Owenism は、たいへん独異な性格をもった思想である。科学的社会主義の立場からは、これを空想的社会主義と規定し、ドイツの古典哲学イギリスの古典経済学とならんで、じぶんたちの世界観の源泉のひとつとみなしている。筆者はこのような解釈を理論的にも実践的にも非常に含蓄にとんだものとする。しかし、そういうことは、Owenism の研究がいつそう深められ豊かにされる 必要がないなどということの意味しない。いろいろの新解釈がでてくるのはとうぜんである。

しかし、ここで考えておきたいのは、思想史研究の独特な思想的性格である。この領域も現代の階級斗争の枠外にあり得ないことを深く反省させられる。思想史の研究は、無自覚な研究者のばあい、そこでは歴史そのものに則して実証的態度を一貫させているだけだと思つていても、その研究者自身の現代社会に対する理論的実践的態度に依存するものである。それはわかりきったことであろう。しかしそれほどあたりまえな事柄は、哲学的に考えてみると、びつくりするほどの現実的意味をもったものである。それは学者の道徳にかんけいし、また学問の科学性、真理性にかんけいしている。

そういう観点から筆者は、さきごろから、或る一つのオーエン解釈について興味をもちつけている。それはオーエンを功利主義思想の系譜に位置づけてとらえ、この哲学者をもともとブルジョアの Ideolog であつたのだというふうに強調する解釈である。筆者がこれに気付いた直接の機縁は「歴史学研究」No. 282 にのつた古賀秀男氏の論稿「ロバート・オーエン研究の新しい展開」をみたことである。古賀氏はオーエン研究の新しい業績として永井義雄氏の「イギリス急進主義の研究」を紹介し、そのさい若干の疑問点を出されていた。それにさそわれて筆者もその本をよんでみた。それは18C末から19C初めにかけて、資本主義が盛大となつていくにつれて、社会思想もかわつていく、以前のロック的自然法思想から功利主義に移行していく、こんなようなことを説明している。ひとくちでいえば、この時代のブルジョア思想の系譜を辿つたものである。そしてほかでもないこの系統の内でオーエンをみている。リカルドから新マルサス主義者、ブレイスからJ. ミル、それにオーエンまでを含む「哲学的急進主義」というものが、えらい具体的なもののようによ説かれており、その概括的特徴は、産業ブルジョアのイデオロギーであり、ベンサム功利主義を理論的基礎としている、のだとことである。この哲学的急進主義に共通しているのは、一方では確立しつつある資本主義的秩序を絶対視しつつ、他方ではその秩序のもとで、いつさいの経済的害悪を除去しようとする、いわば二つの理念が混入していることだそうである。論者によると、理念がこ

のように二重になつていたから、その一方のものが極端になつていき、哲学的急進主義者つまり功利主義者のなかから社会主義者オーエンが「極端な例」としてあらわれても、決して「ふしぎなことではない」そうである。ところが、筆者らには、そこがわからないのである。

どこまでも資本主義社会が調和的であることを信じ、どのような矛盾がでてこようと、それを資本主義的に改良可能であると考えるのが哲学的急進主義の特徴だとすれば、そのような理念はまったく一重であるのではないか。それからまた、オーエンを「極端な例」というならば、この「極端」とは何を意味するのか。あの理念がじつさい一重であるとしたならば、いくら「極端」と規定してみても、社会主義者のオーエンは、本当のところ資本主義者にほかならない、というまでのことではないか。いろいろの歴史的研究をやつたあげくがオーエンは功利主義者の極端な例にすぎないということではまことに歴史研究のつまらなさをかんじさせる。それと同時に、研究者の関心は、じつは資本主義と社会主義は連続するものであるという、まことに通俗的な考えを、オーエン研究という歴史研究のなかで証明することにあつたのではないか、という問題を提起させる。こうなると、それは思想史の哲学の問題であり、充分討論に値することと信じる。じつさい、永井某氏のあのオーエン新解釈はそういうみでは、あたらしいものではなく、類型的である。いわゆる「古典的マルクス主義」はふるくさくなつた。資本主義国であろうと社会主義国であろうと、いまは技術革新の時代である。生産力増強、これが共通した目標になつてゐるではないか。資本主義体制でもそのような生産力主義をとつてゐるかぎり、進歩的なものを含んでゐるのではないか。まあこういった路線はそこいらにいつぱいあるわけである。オーエンを科学的社会主義の先駆としてとらえる考え方に、オーエン＝功利主義者説論者は、ほとんど憎悪の情をこめて、反論をくわえなくなるかのようである。これは特徴的である。じつは、そういう考え方こそ、近代的反動（反共）思想のおもな性質であらうと考える。

筆者は、ほかでもない、オーエンの教育思想をいささか研究して、その人柄と仕事に心より尊敬をはらつてゐるものである。そういう筆者にとつてはオーエンは功利思想家ではない。資本主義の全般的危機における現代に、社会主義の側にたつて、現代の改革を激励してくれる思想家であり、たのもし先輩である、と筆者は考へてゐる。そんなのは、全く主観的妄想であり、すべては専門的な歴史家の分析と判定にしたがえ、といわれるかもしれぬ。思想には思想の運命があるから、その判定とおりになることは一般的にいつても必要ないであろうが、しかしあまりに見当はずれではこまる。ところが、歴史家の仕事がどこまで客観的であらうか。そこがあやしい。殊に思想についての通俗な Philistertum が克服されない以上、思想の歴史はすべて空しいであらう。筆者のような、オーエン・ファンが、あえて評論を書いてみたと思つたのは、やはりオーエン＝社会主義者説がけつしてひからびてゐないということを述べ、歴史家の参考に供し、できることなら、研究上の協力が得たいと願ひたからである。

いずれ自分にも他人にも納得のいくような批判論文を書くつもりであるが、小論はオーエン＝功利主義者説に対する評論の覚え書を書くにとどめる。

II

政治思想・経済思想・社会思想等の歴史の研究書をみると、オーエンがベンサムの影響を

うけたことを否定しているものはすくない。しかし、両者の相違がどこにあり、その相違がどうして発生したか、或るいは、そもそもオーエンの内におさまったベンサムとじつさいのベンサムはどう違うか、こういうことにはつきり答えているものもすくない。だから、もともと、ベンサムのオーエンへの影響自身全体的にまだ十分に研究されていないのではあるまいか。

ところで、オーエン自身がベンサムについて書いた人物評論がある。これは両者の理念史的研究をやつていくさいに生かされてしかるべきだろう。兩人の関係はたいへんルーズなものようである。オーエンは1813年、ニュー・ラナークを経営していくヘゲモニーをえたが、それはかれをおとしめようとした合資者をおさえ、かれの教育事業に同調する新合資者を得ることができたからである。クェーカー教徒を主としたこれらの支持者のなかに、ベンサムがいたようである。すこしながいが、その評論を引用してみる。

「このちよつと類のない計画に一株を申し出たその次の人は、かの有名なジェレミイ・ベンサムであつた。彼はすべてが根本的誤謬にもとづいている法律を、その誤謬を発見することなしに修正せんとする努力に長い一生を費した人で、またそのゆえに彼の一生は、たえまない善意の努力の生涯であつたが、個々の法的害悪を示しそれを救済せんとすることに費され、決して一切の根底をつきもしなければ、それらのものの誤謬、害悪の原因を認識もしなかつた。

彼は書物を通し、また彼との交遊をゆるされたごく少数の自由の心をもつと思われた男女——ジェイムス・ミル、ボウリング博士、オースティン夫妻、フランシス・プレイス、ブルウム卿その他二三の人——を通してのほか、世の中についての知識がほとんどなかつた。——これらが彼の世界をつくつていたのだ。

私がわれわれ仲間の一員として、ニュー・ラナーク会社に彼をいれるに同意してからもなお、彼がわれわれの最初の会見のとりきめをすることが、彼の神経質のためにむずかしいのだと知つて、甚だ興味深く思つた。お互の友人で、当時彼の主な相談相手であつたジェイムス・ミルとフランシス・プレイスとの前以ての交渉、彼と私自身との手紙の往復もあつた後、結局私が或る特定の時間に彼の隠遁者のような寓居を訪れることになつた。しかも私が家に入つていき階段を上つてゆく、その階段の途中でわれわれがあう。こういうことになつたのだ。私はその指図通りにした。しかも彼は大へん狼狽して私に会つた。彼は口早にいつた。私の手をとつて興奮でからだじゅうをふるわせながら、——「よし！ よし！ これですつかりすんだ、紹介された。さあ書齋にいらつしやい！」そして私がいよいよそこにはいり、彼が私に椅子をすすめてから、彼の骨のおれる大変な仕事をしてのけて、ほつとしたように見えた。彼は一株もつた。そして彼の友人たちの話では、これが彼の関係したことのある事業で唯一の成功したものであつたそうだ。彼もニュー・ラナーク工場には、ただの一度も見にこなかつた」（五島 自叙伝178ページ岩波文庫）

思想家の研究のためには、かれの個性的内面的発想法に注意することが大切である。ところでそのような個性は実践の次元でもつとも本来的に個性的となる。すると実践化された思想は、客観化歴史化されたものであり、それゆえに社会的となつた思想でなければならない。思想の系譜というものが観念的でなく、根拠をもつことができる理由はそこにある。しかしながら、人間の語るロゴス的理論的意見だけを抽象化してその人間の思想と混同するまちがいにわれわれはしばしばおちこんでいる。このことをしつかり自覚しなくてはならな

い。もし思想の内的個性の側面を軽視し、つまり個人の歴史的実践の次元においてかれの理論的意見がどのように発現するかの考察を無視していくと、いわゆる思想系譜論は形式的観念的なものになってしまうだろう。

さて上述のオーエンのペンサム論をかれの他の議論と関連させてみると、さまざまな大切な観点、かれの思想を理解するうえでのヒントを得るように思う。

むしろオーエンにはそれのくわしい認識論はない。しかしながら、そのこのところをわれわれは深く解釈していかなければならないであろう。

たとえば、第一に気付くことは、かれの理論と実践に対する態度である。すくなくとも、書斎派的文献学者の十分には評価できないところの、思想に対するきびしい姿勢が指摘されているのではないか。かれは、かなり意識して学者的理論の批判をしている。しかも、このことは、オーエンのどの段階における活動においても、またその活動のどの領域においても共通し一貫していることである。経験的事実と知識的内容とを等置しやすい学者的理論の性格。これについての不信をいつでも述べているのである。「恒久的な利益をもたらす社会の変革をなしとげるためには、行動することが喋ることよりはるかに大切であることを私は発見しました」（ニュー・ラナーク州住民への講演）というのが、オーエンの態度であつた。

それはあらゆる機会に述べられているが、その一例として、かれが宗教論争のさいの論敵たる学者について述べた発言を引用しておく。

「私は Campbell 君が他人のあれこれの諸見解について該博な知識をおもちになり、これを大いに論じてくださつたことに御礼を申し上げねばなりません。といいますのは、私はそういう見解をこまかく知つておくことなどにあまり努力を払わなかつたからです。私の探求はそんな興味にはしたがいませんでした。私は、そんな理屈にはあまり有用な実践的知恵がひつついていないことを確認してからは、そういう態度をとつてきました。私が問題にしている対象の本性上、私はどうしても実践的人間にならざるをえませんでした。すなわち、私は《生活そのものから研究し、そういう原典のなかで人類を精読する》ようにならずにはおれなかつたのです。私は形而上学的読書をまつたく避けてきました。なぜならそんな研究は社会をその誤謬と困難から救済させることにはむすびつかないことを知つたからです。そこにはあまりに多すぎる言葉があり、あまりにすくなすぎる事実しかないのです」(Cp. Harvey, Robert Owen P. 157, Robert Owen and Alexander Campbell, Debate on the Evidence of Christianity)

正直いつて、オーエンはたくさんの学者の著作を読んでおらず、読んでいても不正確らしいようで、したがつてかれの理論的水準は低いものだなどということを考えている研究者も多いのではあるまいか。しかし、実践的人間を強調したオーエンが理論的活動をばかにしたのだというふうには解釈できない。むしろ、理論が理論の資格をそなえるための認識論的構造をよくよく反省しなさいと教えてくれたものととれる。

もつとも、つぎのようにいう人があるかもしれない。オーエンがそのように経験的事実と実践をおもんじ、形而上的文献知を排斥したのは、それこそ功利主義の特徴ではないかと。しかし、筆者はこれに無条件で賛成できない。もしオーエンが功利主義の友だとすれば、そのような功利主義はたたかうそれであり、全人民的性格をそなえているのでなければならぬ。それにしても功利主義をあまりに広義に解するのは混乱をおこすものである^註。定式的に言えば、そのようなオーエンの側面は、じつは唯物論的なものであるとして整頓する必要が

ある。

ベンサムの学者先生の神経質についての手きびしい批判にしても、それは世界に対する全面的認識＝唯物論的認識の缺乏をこそ指摘したものと解釈される。ベンサムが法律制度の掟つてたつ根本的誤謬を知らなくて、個々の法の害悪を救済しただけだという規定は、たいへん単純ないいかたではあるが、およそ斗争をやめたところの、或るいは人民的党派性をずてた思想の一面性をつかんだ卓見ではないだろうか。法律の根底にはたらく社会全体の運動法則にかんする全面的合理的認識をあきらめたならば、たとえ個々の法律を修正して現実を改良していこうとする経験主義的態度をとろうとも、しよせん実在は経験と等値され、つまり実在は経験（ブルジョア的）の内容に包摂されつくされるのであつて、経験の実体については何事も問わないということにならざるを得ない。オーエンは、まさにこのような Obskurantismus をベンサムにおいて 指摘したのではないか。そのするどさは、あれとこれとを混同させることをゆるさないほどだと思われる。オーエンのこのような考えは、そのまま現代のありとあらゆる改良修正主義の批判にも適用できるだろうと思われるほどである。

なお附加して述べるならば、オーエンが先輩の理論を摂取するさいの独異性である。かなり自己流に解釈するという点である。かれの著作のなかにはほとんど学者先生の著作や人名があらわれない。ひとたび彼の内にはいりこんだ思想は彼なりの位置づけを得ているといえるのではないか。それはオーエンの学習の主観主義を示すといえまいであろうが、同時に生きて働く思想に注意するならば、きわめてあたりまえであり、しかも重要な事柄であろう。

注 毛沢東は「文芸講話」のなかで、社会主義を「革命的」功利主義とよんでもいいと述べた。しかしこれは啓蒙的いい方であり、社会主義倫理を宗教から区別したいためのものと解したい。そうでないといふと、たとえば大阪唯研の諸兄のように、毛沢東的社会主義はプラグマチズムのブルジョア思想とどこが違うかというふうな問題提起がでてきて、それもむりからぬものとなるであろう。

III

論者によれば、哲学的急進主義は産業ブルジョアのイデオロギーだという。ひとつの思想を特定の階級の身体にやどるものとしてふりあてることに異論をいうつもりはない。しかしながら、一方ではイデオロギーの相対的独立性を、他方では特定の階級の現実と実践における動的性格に注意しておくのは重要である。功利主義思想そのものを理念的に考えることはできる。それだからこそ、その定まつた担い手に固定されないで、独異な運命をたどることも可能になるのだろう。またひとくちに産業ブルジョアといつても、階級斗争の社会的連関のなかで、進歩的にもなることができるという事情も考えておかねばならない。思想と階級を歴史的具象性においてとらえるということである。

ところで、哲学的急進主義を支える産業ブルジョアは、オーエンの時代、いつたいどういう地位にあつたのか。そして一方では、オーエン思想を支持し受容していつた階級はどんなものであつたか。こういう事柄については、それこそ歴史研究家からくわしく学びたいものである。歴史的分析によつて、オーエン思想を支えるものは、すくなくとも産業ブルジョアではなく、むしろ労働者であつたこと。産業ブルジョアは、その時点では、支配階級であつて、はつきり反労働者的である。こういうことを大略みることができるとしたら、それだけ

からでもオーエンをブルジョア 功利主義の 路線にひき入れるのは 無理だということになるう。

その時代の現実的階級斗争の研究が絶対に必要である。これを省略して、まんざんとオーエンを産業ブルジョアの Ideolg と規定したりするようでは、これまでの形而上的な哲学者の思想史研究とかわらないものといえる。

18C 終りから 19C にかけて、産業ブルジョアがとつくに反動化していたという歴史については、Cole や Morton の資料をみるだけでも想像されるが、その歴史的証明の研究として、筆者の知ることのできたものでは、慶応大学の飯田鼎氏著「イギリス労働運動の形成」一巻をあげたらよいと思う。

飯田氏はイギリスにおける資本主義の生成発展に応じて労働運動にもながい前史があるが、18C 末から 19C 初めにかけての産業革命期には、誰によつてもまちがつて解釈されることのできない形態になつてきたことを説明している。ブルジョア的自由主義の偏見は、資本主義を封建主義にくらべて進歩的なもののように思いこむ。しかし、この転移の過程は搾取者の交替の過程にすぎないのであるから、資本はその生誕のときから brutal なものである。マルクスの資本論はこの単純で、実践的に有効性をもつたテーゼを教えている。イギリスの歴史上最大の暗黒期をひらいた例の Combination Act は若い資本家階級が大衆を敵視すること保守的貴族をしのぐものだとすることを証明したものである。なるほどあの暗黒期においては、労働者階級は概して急進主義者の指導下にあつたようにみえる。しかしかれらの思想と行動はその指導者のブルジョアの射程を越えていた。すくなくともそれとは異質なものをもつていたのである。かれらは階級的団結がいかに重要なものであるかを確認していた。たとえば労働組合をつくり、しかも全国的大同団結にむかつて努力していた。それはあの苛酷な弾圧下にあつてもやまなかつたのである。団結禁止法をやめさせるにはブレース (Radicalist) が大きな役割を果たしたというのがブルジョア史家の常識になつているそうだが飯田氏はこれを否認している。またラダイト運動にしても、これまで機械を憎んだ絶望の大衆運動とみられてきたが、あれはそんなものではなく、かなり積極的合理的な大衆の団結した斗争ではなかつたかとおもしろい問題を提起されている。要するに団結禁止法を撤廃させていつたのは労働者階級のエネルギーであつた。だからブレースのような物わかりのいい急進主義者が世話をやき、団結禁止法がなくなつた。そこで 30 年代の急激な労働運動の高まりをみるようになった——こういうふうには考えてはならない。すでに四半世紀という期間にわたり不断の斗争によつてあらゆる迫害に耐えてきた輝かしい伝統があつたからこそ労働者階級の勝利は実を結んだのである。

以上は飯田氏の歴史的な研究から筆者が学んだ要点である。とくにナポレオン戦争後の大恐慌によつて、資本と労働との対立がいちだんと明瞭になつていきつつあつた時期では、産業ブルジョアが労働者の団結と抵抗に不安をかんじ、とうていこれに同調できなかつたことはあきらかである。あの Reform Act (1832) は、かれらの反労働者の態度を証明したものにほかならない。

哲学的急進主義がそういう反労働者の姿勢を理論にまで翻訳したものだとかざりで、産業ブルジョアのものだというのは納得できる。論者たちのいうように、かれらには共通して新マルサス主義が指摘できるというものなるほどと思われる (もつとも Ricardo のばあいには特別な検討が必要だろうが)。ところで、オーエンがそれと同じ思想体質をもつたものとい

えるだろうか。性格形成論、工場法制定、新協同村の提唱、そのいずれの段階における思想と行動をみても、すくなくとも反労働者の姿勢をみとめることができないと筆者は考える。するとこういわれるかも知れない。いや哲学的急進主義者或いは功利主義者はみな教育をおもんじる、健康と富と知識は功利主義者の三宝ともいうものであり、労働者が封建的に考えるのをやめて自分で自分の運命をひらいていくような近代人になつてもらいたいと願っている、そうすれば契約自由の合理的精神をもつた労働者はやれ団結だ組合だ斗争だなどといわなくなつて結局資本家のとくになることゆえ……工場法の制定だつて功利主義者は考えますよ。要するにオーエンの考えたこと行つたことみな功利主義とおなじであると。新協同村の提唱は……そこはちよつと変なところだが、しかし哲学的急進主義は労働者をむちうつだけの野暮な資本家の思想ではなくて、かれらに飴をなめさせることの意義を知るに至つた啓蒙的思想であるから、その路線がオーエンでは「極端」にでてきてコムニズムになつたといえるのだ。筆者としてはこういう解釈はいかにも乱暴な思想の理解法であるように思う。もしも鞭と飴をつかいわけるといふことならば、なにも哲学的急進主義の啓蒙的英知をまつまでもない。惨忍きわまる Combination Act を強行したのは、非常に多く、資本家的要素であつたのであるが、かれらは同時に他方では「工場法制定」を出しているのである。（前者が1799年後者は1802年である。Robert Peel の人道的なこの政策は団結禁止の弾圧政策の同じ楯の一面にすぎない）。

さてオーエンと労働者階級との関係はどうであるか。なぜオーエンの思想が労働者階級に支持されたか。しかもそれが永続しなかつたのは何故だろうか。労働者の要求を超越してひろがる Owenism の思想としての性格はどこにあつたか。こういうことを研究しなくてはならない。オーエンが資本家に支持されなかつたことはまず間違いない。これはわかりきつたことのようなのだが、オーエンの思想そのものを性格づけるには無視できない事柄であろう。物分りのよいクェーカーや功利主義の合資者でさえ、オーエンの労働者教育に積極的な興味を示してはおらないし（「かれらはいちどもニュー・ラナークを見に来なかつた」）、オーエンの学校の反宗教的教育方針を非難してオーエンをかれの工場からいびり出したのも、実はクェーカーであり、功利主義者であつたともいえたのである。

ところで、上述のオーエンと労働者の関係については、九州大学の新進西洋史学者古賀秀男氏の労作「イギリス初期協同組合運動の基本的性格——オーエン主義の社会的基盤」（九大西洋史研究会編「西洋史学論集」第三輯）は筆者にとつて、もつとも教わるどころ大なるものがあつた。そこで学んだ要点を述べてみよう。

まず興味深いのは、オーエンを支持した労働者が、物質的精神的にも近代資本主義の内部で賃金労働者の地位をもつた労働者とははつきりいえなかつたという点である。産業革命の経済的变化を基礎にして、労働者の雇用と供給に対する前近代的制限がしだいにとりはらわれてゆき、熟練や生活水準が法律や慣習的な規則によつて保護されてきた職人労働者は、急速に独立生産者の地位をうしない、プロレタリア化しつつあつた。そこで、そこに圧倒してきた自由放任と契約自由のブルジョア的産業政策の苛酷さに対抗して団結してたたかうとする労働者の運動がうまれるのは必然的であつた。ところが、そのような思想と行動を示した労働者が、どちらかといえば、産業革命が一挙にうみだした繊維、炭坑、農業等における半ば飢えた低賃金労働者ではなくて、或る程度の人間的独立をもつていた熟練工たちであつたといえる。オーエンが建築労働組合に接近し、Grand National Consolidated Trades Union

の指導者になつたことは有名な話であるが、その組合員とは大体において上述のような労働者であつたといふことができる。

古賀氏は例えば建築工組合に拠つた労働者の性質についてめずらしい資料にもとずき紹介してくれる。大建築工組合が1832年結成され、ロンドン、マンチェスター、バーミンガムを中心に活動をはじめ、ランカシア地方では強力広汎なストを展開している。20年代以前には比較的いい生活をしていた建築工が何故このように激しい斗争をやるようになったか。それは、資本主義的雇傭制度の攻撃に対する抵抗からきている点が大きかつた。当時ロンドンから拡つてきた総請負制度がそれである。この制度は従来の個々の建築工による請負制度に代つて、有力な資本家的総請負人が各種の建築工と賃金労働的雇傭契約をする制度である。その結果じつさいに働く小親方はその権利をうしない、不熟練又は未熟練の建築工賃労働者と同等の地位におとされるようになりかねない。それゆゑ抵抗運動の主勢力は不熟練の賃労働者ではなくて、熟練工および小親方、とくに前者であつた。すなわち、この契約制度に反対した理由は、一部はそれが熟練職人たちから親方になる機会をとりのぞく傾向をもち、また一部は実労働をしない総請負人が種々の職種の伝統的な規則や慣習を無視しがちであつたからである。

初期の協同組合運動で熱心にオーエンの思想を支持した労働者たちも大体上記の労働者と似ている。その個々の組合について古賀氏は刻明に吟味されているが、組合員は工場制産業の発展のために没落していく Artisan の層が多かつた。そのことは、初期協同組合が消費組合的よりも生産組合的なものであつたことでも示される。例の一時人気のあつた「労働交換所」にしても、そこでは消費物資の卸売は二の次ぎで、主として生産物の交換が好まれていたのである。

こういう事情があつたから、資本の圧迫のもとに苦しむ手工業職人たちは、労働全収権を説くオーエンにひきつけられていつた。「われわれは自分の働いたものの八分の一或るいは四分の一しか得ていない。もしわれわれが自分自身のために働くことができたならば、われわれは全部を獲得することができる」こういう Owenism の生産組合をすすめる考えは、これらの労働者の福音のように思われたのではないだろうか。

「要するにオーエン主義の社会的基盤は賃金労働者意識に貫かれた真のプロレタリアートではなくて、いわば小生産者意識によつてみづからを束縛していたところの、没落を強いられた反資本的意識をもつた熟練労働者層であつたといふことができる」これが古賀論文の結論である。

われわれはこの研究から Owenism の理解上大きな示唆をうける。いろいろのことを考えさせられるが、まずすぐ問題になるのは、オーエンの思想は上述のような労働者に支持されたとともに、それを超越し、はみ出していることである。多くの協同組合はオーエンによれば、農業・工業・商業とを結合した一致と和合の協同村を建設するための手段又は準備にすぎないものであつて、たんなる消費組合にとどまるべきものではないし、また狭い枠の生産組合にかぎられもしない。労働組合にしても日常的経済条件の改良運動にとどまるのはオーエンの思想ではなくて、生産組合としての機能をいとなみ、しだいに社会主義的協同村をきずいていく基礎的橋頭堡として意味をもつものである。僅かの期間をもつてオーエンが労働者との直接的縁をなくしていつたのも、そのためであつただろう。

オーエンの思想が上述の労働者の要求をはみ出した点に注意しなくてはならない。それは

いつたい何であるか。

オーエンを哲学的急進主義の系譜でみようとする論者は、生産力主義に興味をもっているらしいから、おそらく、オーエンが工場制的機械生産を熟知し、これを前提にして考えた点をはみ出す側面だというであろう。そしてそのかぎりでは異論はない。しかしながら、それを功利主義思想の表現だとみるのは見当ちがいである。筆者はこれについてつぎのような見透しをもつものである。オーエンのその側面は、かれの眼中にあつた労働者とは単に小生産者の熟練工とか農民にかざられたものではなく、ニュー・ラナークで教育の対象としたところの悲惨と無知に苦しむ下の下の労働者をも包括していたということをゆびさすのではないか。したがって、それはどうしても社会主義とむすびつく。Rosenberg が大変きびしく、オーエンをリカルド派社会主義と区別するのも、そのためであろう。またロッチ・デールの開拓者からはじまる資本制に満足した上層労働者の倭小な協同組合思想とは異なっているのもその点であろう。哲学的にいえば、その側面は唯物論ではないかというのが筆者の見解である。

IV

オーエンが性格形成論の第三論文を出すときに、その序として、工場監督者或るいは経営者つまりかれの言葉によれば「まとまつた人びとに雇傭をあたえてやることによりそれらの雇傭人の考えと行動の仕方をたやすく教育してゆける便宜をもつた人士」に対する Address を書いている。この献辞こそは申分なくオーエンのブルジョア精神を示すものだといわれる。そのように解釈する論者が、これはどうだとききつけるオーエンの発言のなかで、もつとも本質的とみられるものは、つぎのような叙述にあるだろう。

“Experience has also shown you the difference of the results between mechanism which is neat, clean, well-arranged, and always in a high state of repair; and that which is allowed to be dirty, in disorder, without the means of preventing unnecessary friction, and therefore becomes, and works, much out of repair.

In the first case the whole economy and management are good; every operation proceeds with ease, order, and success. In the last, the reverse must follow, and a scene be presented of counteraction, confusion, and dissatisfaction among all the agents and instruments interested or occupied in the general process, which cannot fail to creat great loss.

If, the due care as to the state of your inanimate machines can produce such beneficial results, what may not be expected if you devote equal attention to your *vital* machines, which are far more wonderfully constructed?” (R. Owen, A New View of Society etc. everyman's library P, 8)

上記の文中でオーエンは明瞭に人間を機械とみている。ふつうの機械でも、これをていねいに扱えば、全然手いれをしない乱暴にあつかわれる機械よりもずっと大なる成果が得られるのだから、ましてはるかに精巧な機械である人間のばあい、この道理はいうまでもない有効性をもつだろう。利害得失を計算したときには、労働者をていねいに扱ったほうが乱暴につかうよりも結局とくである。このように発想したオーエンは、労働者に「あめをなめさ

せ」かれらを「馴致」したとき、どんなに利潤が大きく、しかもそれが確保されるかを自覚した資本家である。「人道主義者」の実体はこういう功利主義者であつたことを注意せよ。大体こんなのがオーエンの新解釈として出されているわけである。

ところで筆者はオーエンの人間機械論から今日のわれわれが学びとり発展させていくべきものは、功利主義ではなくて、唯物論的人間観の側面でなければならないと考える。そしてそれがまた「歴史上のオーエン」の主要な性格であつたであろうと思う。もちろんそれを弁証法的唯物論とみたりするつもりではない。その点からいえば、Cornforth が名ぞしでオーエンを例にあげて示しているように、機械的唯物論と解釈していくのが妥当であろう。(Cornforth, *Materialism and Dialectical Method* Vol. I P.43)

すでに Descartes が動物はすべて自動機械だといつたとき、人間と社会に対する唯物論的考察の準備はなされていた。それは Spinoza や, Didro, Lamettri のなかで発展し、首尾一貫させられていった。オーエンもその流れをくむものといえよう。もちろん人間をとらえるとき、いわば力学的運動のみであらゆる運動を割り切る立場から接近するのは、浅薄であろう。意識は物理的力学的運動とは違つた運動にしたがつているのだから、機械的にはたらく肉体のみを典型として人間をとらえてはおかしなものである。ほかでもない機械的唯物論のこの浅薄な側面をオーエンのものだと主張しているのが、オーエン＝功利主義者説の立場だと解釈される。人間をはたらかせてもうけるブルジョアからみれば、労働者は圧倒的に機械とおなじものでしかないだろう。

しかしながら、すでに機械的唯物論の先駆者たちがそうであつたように、オーエンもまた人間の自由を探索し、それを歴史のなかに実現しようと努力した人でこそあつたのである。この問題を考察するときに大切な視点のひとつは、オーエンが宗教をきびしく且執ように批判してやまなかつたその意味を考えることである。とりわけオーエンのキリスト教に対する姿勢はどうであつたか。

われわれは1817年夏に City of London Tavern でおこなつたかれの有名な宗教否認の大演説を知っている。かれはみづづら述べているように、いのちをかけてこの演説にむかつた。なぜそんなにまでこれに重要性をおいたのか。それはこういうことだと思う。宗教的偏見を認めたり、これを寛大にしておいたのでは、オーエンの新社会は実現不可能である。或るいは、より正しくいえば、そういうものの思想的ヘゲモニーを認めてはだめなのだ。宗教は人間を狂信者か偽善者にしてしまい、社会の不一致、虚偽、罪惡の源泉になるものである。主観的分派分裂主義。貧困と悪性格になやむ無産者に対して、かれの責任を問ひ罪惡を責めるのはいかなる意味があるか。かれらに何のところがあるか。現実、ありがたく、とおとい自由なる spirit というものによつて、どうにでも改良され変革されるものなのか。要するにオーエンによれば、宗教は、かれの新社会建設の理論つまり人間性の科学、或るいは環境の人間性に及ぼす影響の科学とはまったく対立している。このような不一致は、唯物論と観念論のそれであるということができる。

もつともげんみつに考えると、現実の合理性を主張する側面は却て現実の観念論的把握につながっていくのではないかという疑問も出てくるだろう。これは、あとでも触れたいと思うが、一つの問題になるだろう。しかしながら、それを経験主義の見地から形而上学的なものにすぎないではないかといひ、かんたんに捨ててしまうわけにはいかない。むしろその積極面をみるべきである。すなわち、およそ現実を変革しようとする実践は、現実の運動法則

の認識にもとづかねばならないという考えは、唯物論的認識の基本的要素でなければならない。そういういみで、オーエンの思想のなかには、實在の可認識性或いは合法則性の確信というべき科学的理論および変革への楽観がふくまれているのである。なぜそういうことを云つておきたいかといえ、功利主義のもとづく経験論的認識論のなかにはそのような要素が含まれておらないからである。

哲学的急進主義においては、すでにブルジョア的平等の主張が社会的不平等をおしつけていくことだということを自覚しており、それだけ階級的にぬけめないものであつた。オーエン＝功利主義者の論者もすすんでそれを認めている。ところで、そのような功利主義は實在の合法則性の認識には確信を失っているのである。ベンサム風の「最大多数の最大幸福」などという発想が、じつは真の自由と平等に対する自信喪失、ブルジョアの動揺からきているとみることができる。それだからMarx や Engels は、こんなのを自覚したブルジョア思想つまり全くの俗物思想だと規定しているわけである。それはつまりところレセ・フェールを主張しているのであるが、Adam Smith ほどの自信はない。功利主義は個人の利益と社会の利益の宇宙の實在の一致を確信することができなくて、換言すれば物質的現実の合法則性について、どこまでも探求するのをやめて、実利 utility つまり pleasure, pain の多少の経験のみしか認めなくなっている。主観的（ブルジョア階級的）にとらえられた pleasure, painこそ實在であり、いくら困っている大衆をみとめても頬かむりで通るか、或いはそんなのは観念的に（政策や教育の施策で）なんとかなると考える。このようなのは観念論的思想というものであり、とくに主観的観念論である。それゆえ、功利主義は宗教に対してもはなはだルーズな姿勢をとるものであり、ブルジョア的に狡猾でさえある。真正直にラジカルなオーエンは上述のように宗教に反対し、そのため上流人のすべてから見離されたのであるが、功利主義はどうであつたか。たとえば、ニュー・ラナークの教育に対するクェーカーの非難に同調するか、黙過したという事実は、その性格をゆびさす例ではあるまいか。

オーエン＝功利主義説は、オーエンが近代的機械の生産力としての進歩性を承認したこと、そのうえにたつて人間の労働生産力をただしく評価したことに大なる意義をみとめるのだというであろう。社会思想史家のなかにはオーエンを現代の「生産力理論の先駆者」とみようとする人もある（たとえば、高島・水田・平田共著「社会思想史概論」172ページ）。問題のオーエン＝功利主義説はこういう解釈から出発しているものともいえそうである。ただ生産力理論の先駆者説がまだあいまいであり、社会主義者としてのオーエンをあまり無視してもおかしいと気にしているかのようなのに対して、ここではあつさりブルジョア思想の路線で割り切つたということが出来る。もつとも、オーエン＝生産力理論説そのもののなかにオーエン＝功利主義者説は内包されているといえそうである。生産力理論とは、こんにち、修正社会主義の或る種のものをさすことは理論的にも実践的にも実証されている。ただ生産力と生産関係との弁証法的統一を考えると、生産力に対して指導的な、革命的な Primat をおくというのは科学的社会主義の重要な特徴であるから、生産力理論が社会主義的考えの本筋をつかんだものとして自分を主張したりすることもあるわけである。しかしながら、オーエンを生産力理論家にみたてたい論者たちは、一方において、オーエンは「現実的であつた」或いは「実務に通じた工場主だつた」といいつつ、かれの超階級的技術主義みたいなものを指摘し、他方においては、資本家として「労働力保全政策」をとつたものと規定するようである。それでいけば、いずれにせよオーエンの社会主義的性質は消去される。そこで

つまるところブルジョア・オーエンがのこるだけである。そこから、しだいに首尾一貫した確固たる功利主義者オーエンが前面に出てくるのは当然の成行であろう。

「ラナーク州への報告」の冒頭で、オーエンは新社会を構想するさいの根本原則をにかけている。それはつぎのようである。

- 1 もし指導の仕方が正しかつたならば、肉体労働はすべての富と国家の繁栄のもととなるだろう。
- 2 もし指導の仕方が正しかつたならば、肉体労働は労働者にかなり安楽な生活を保証するに必要な経費はもちろんのこと、さらに、これをはるかに上廻る価値を共同体にもたらすであろう。
- 3 もしも適当な指導があつたならば、肉体労働は、そのような価値を、世界中のあらゆる国で、いつまでも、しかもどんなに人口が増加しても、もちつづけることができるだろう。
- 4 もしも肉体労働の適当な指導策がとられたならば、大ブリテンとその属領は、どんなに人口がふえても、増加した人間を全住民の大利益になるように、ちゃんと養つていくことができるだろう。
- 5 肉体労働が適正な指導をうけたならば、長年月のあいだには、人口増加によつてもたらされる共同体の利益の増大は、きつと、人口増加のテンポよりもはるかに大なるものとなるだろう。（拙訳「社会変革と教育」103ページ参照）

ここで「正しい指導」とか「適切な指導」とかいわれているものは何か。その認識論的構造はどういうものであるか。それはひとくちにいつて、社会にかんする科学的唯物論的認識にもとづいた実践知といういみにおける政策であろう。オーエンの概念にはいろいろ未発展なものがふくまれていることは否定できないが、このような政策概念を先取したものともみることができる。すくなくともあめとむちのブルジョア的功利主義の路線でそれを解釈するのは、あまりに主観的であると考える。

かれが肉体労働すなわち肉体労働者の貴重なことを提唱するのは、決して単なる倫理的要求ではない。社会における労働と生産の基本的客観的意味を知つてのことである。労働生産性、生産力の増大が社会発展の根本的前提と考えておつたからこそ、機械的技術の発達を労働生産性の向上として承認し歓迎しているのである。ブルジョアの pleasure の計算からそうしたと解するのは、行き過ぎであり不当であろう。また他方、それを実務家的企業人的センスとか現実主義からそうしたというのも、いわば、行き足りない¹と考える。

ここで社会にかんする科学的理論、これにもとづく政策と無産労働者階級の党派性との統一、という唯物論のテーゼをわれわれは想いおこすのである。なんらかの意味で、オーエンの社会科学は労働者の党派性とむすびついておる側面をもっているのではないか。それはもちろん今日の社会主義ほど明瞭でない。それはいうまでもない。しかし、その側面をまったく捨象して、労働者階級との関連をこの階級に対する「独特な姿勢」をとつたというような偶然的なものとしていくのはおかしい。すると、こういわれるかもしれない。オーエンはいかなる党派性もとらなかつたではないかと。たしかにそのとおりである。かれにおいては、人類的普遍 (Allgemeines) と個人的個別 (Einzelnes) とを媒介する階級的特殊 (Besonders) の論理がみとめられていないといえるだろう。しかし、そこにいわれる人類、社会の全体が不思議に抽象性神秘性を免れているのはなぜだろうか。おそらく、その秘密は、オーエンのなかには或る程度まで大衆的立場が含まれておつたからである、といえないだろうか。逆説

的云い方ではあるが、かれがまさに人類と社会全体の利益を強調したということ自体がそのことを示すともいえるだろう。たとえば、前述した根本原則の叙述につづいてオーエンはこう書いている。「知識と科学の援助をうけていけば、新生産力の増大とその賢明な指導に正比例して、社会の富と幸福はどんどんふえていくのが当り前でしょう。じつさいは、こういう利益をすこしもあげていないのです。むしろ反対に、人口の非常に大きい部分を占める労働者諸階級は、以前その働きによつて得ていた生活慰安品さえ手に入れることができないでいること、かれらがそんなに窮乏しているためにこそ、どの当事者もなんの利益も得られないで、みんなが困っているというのが否定できない事実ではありませんか」(拙訳前掲書109ページ強点筆者)

ここで労働者階級が困っているから万人が苦しんでいる、という発想に注意したい。そこでいわれる万人は労働者階級を媒介にしたものでなければならない。それだからこそ万人は抽象性をまぬかれている。レセ・フェールの主体として個人→利益計算→労働者への関心、このような順序はオーエンのものではない。たとえば、前述した性格形成論の第三論文の献辞にしても、その訴えの対象とした企業家は、労働者階級の教育を行うための諸手段の便宜を多く所有したもの、という規定を与えられているのである。この側面を見落してはならない。もちろん、繰り返しいうが、オーエンにおいては階級的特殊のカテゴリーが不明瞭であり、それに対応して国家権力の階級的性格の把握がよわいために、かれの党派性は観念論的内容をもつた倫理的命題でしか表わされなかつたといえるかもしれない。しかし、こうした事柄についても、それをよくよくていねいに考察することが、二重の意味で重要だと考える。第一に、それは、不十分とはいえ社会を唯物論的に精一杯考えようとした延長線上におこっているということ。第二には階級的利益の主張は歴史的実践のなかでは、人類の善の理念とかならず媒介されるものであつて、いわゆる経済主義の倭小な思想領域内部に踞踏され得ないこと、それゆえにオーエンのこのいわば観念論的逸脱のなかにさえ学ぶものがあるのだということ、である。あの Engels の「イギリス労働者階級の状態」は、労働者の党派性をもつて研究すればこそ、資本主義社会を客観的全面的唯物論的に把握することができるのだということを、たいへん直観的に示すものであつたが、オーエンにおいてもそれに似たことがいわれるであろう。たとえば、教育理論において、幼児を可能的生産力としてみていくオーエンは、同時に「情愛さえ得られると、幼児はいつでも生れながらの能力をよるこんで自発的に、最高限度にまで発展さすものである」ということを確信した人であり、かれの性格形成学院に送ってくれるのを訴えている子どもについて「当学院は、社会の最悪の成員とみさげられた両親の子どもと最良の成員として尊敬されている両親の子どもとをすこしも差別しません。むしろ最悪の成員をこそ受け容れた方がよいと思うほどであります。なぜかといえ、このような子どもこそ私たちの世話と情けをもとめているのですから」(拙訳前掲書20ページ)と述べる人なのである。これを、「そのようにすれば資本家としてもうかるから考えたことだ」というふうに、功利主義的発想の証拠とみていくことができるだろうか。むしろそれとくらべるとオーエンの博愛主義をひきだすありきたりの解釈の方が適当かもしれない。ただこのような博愛は、オーエンの唯物論的人間社会観とつながっている、その線上において位置づけられるものだろう、というのが筆者の考えである。つまりオーエンの思想の骨組を観念論的なものとみるわけにはいかない。つぎのようなオーエンの思想は、非常に多く社会を弁証法的にとらえ、資本制枠内における生産力と生産関係の矛盾、大衆の窮乏

化法則などを看破したものということができるが、このような科学的考え方はいつたいどこから生れたのか。それはオーエンの唯物論と労働階級的党派性（上述説明したかぎりの）から来ているのではあるまいか。

「蒸気機関と紡績機械の導入は人間の力を非常に増大させました。これらの機械によって、半世紀のあいだに、わがくに住民の生産力或いは富をつくり出す手段は十二倍以上になり、ひいては他国民の富をつくり出す手段を非常に増大させてやることになりました。しかしながら、蒸気機関と紡績機械およびこれにさそわれてできた無数の発明は、社会にさまざまな害悪をおよぼしました。この害悪は圧倒的に大規模であり、いまでは機械の発明であげられた利益をまつたく帳消しています。機械は富の一大集塊を創造し、これを少数者の手に専有させました。少数者はこんどはこの富の集塊を所有しているおかげで多数者の勤労によつてつくられる富を収奪しつづけているわけでもあります。こんなふうで、大衆はこれらの独断家の無知と気まぐれのたんなる奴隷となつてしまい、ワットとアーケライトがあらわれる以前よりもはるかなさげない惨めな状態になりました」（拙訳前掲書125ページ）

以上のように考察してみると、オーエンの「生産力理論」を超階級的技術主義の路線で割り切つたり、ましてや、ブルジョア功利主義とむすびつけたりできないであろう。このような解釈は、案外、そもそも唯物論と経験論、社会主義的現実主義と功利主義を区別することをしない思想の混乱からきているのではなかろうか。

V

いつぱんに機械的唯物論の根本的欠陥は、弁証法的思考のよわい点にあつたということができる。世界が一つの機械体系のようなものとみられるならば、どうしても世界の運動の第一始動者が設定されなくてはならない。物質的世界の外側に、“supreme Being”がみつめられなくてはならない。たとえかくのごとき絶対者がいちいち世界に干渉するのではないとしても、事物のいつさいの運動をささえるものとされるならば、それは事物の窮極的な始動者であり、この世の出来事いつさいの凝視者となるものといわねばならない。

そこからオーエンのつぎのようなテーゼがでてくることができる。

「人間によつて知られているすべての事実はつぎのことを示している——あらゆる存在者については、それが存在しているという事実からして、それらの存在者を存在せしめる外的又は内的的絶対的《原因》があるのだということ、それだからこうした宇宙におけるいつさいの運動と変化のもつとも一般的な原因となつているものこそ、世界の諸国民が神とかエホバとか天なる父等々という名前で呼んでいるあの不思議な力（that Incomprehensible Power）のことだということ、しかしその力が何であるかを明示するような事実はまだ人間にはわかつていないということ、これである」

これはオーエンの「合理的宗教の原理と実践」（1844. The Book of New Moral World. The Fourth Part 五島著オーエン著作史400ページ参照）のなかに掲げられている諸法則のなかの第一法則であり、かれが絶対的他者として世界の第一始動者たる“supreme Being”をみつめている宣言とみられる。このテーゼからでてくるオーエンの思想的特徴を考えると、いわば相対立するふたつの事柄が指摘されるように思われる。第一は、いわゆる環境

決定論の科学的唯物論的思想をますます intensify して、その自信をつよめていく方向である。それを裏書きするものとして、前記のテーゼにすぐつづいて、「したがって、人間の外的内的性格は人間のために形成されるのであり、人間によつて形成されるのではない。それゆえ、人間をほめたり罰したり、酬をあたえたりとりあげたりすることは、この世においてばかりでなく、どんな未来の世においても、あり得ない道理である」という法則が提出されているのである。ところで他方において、上記のテーゼは、オーエンがあらゆる歴史的宗教の限界を突破して、逆説的にいえばそれらの信仰よりもさらに大規模に、宗教的な思想の友であることを示したともいえよう。どんなにすぐれた人間の理性的能力をも超越する力をみとめているかのような側面である。

ひとくちに言えば、オーエンにおいては、唯物論的思想と宗教的思想がびつたりひとつになつて存在していることに注意しなくてはならない。こういうばあい、それを Deismus とみなして、大体においてイギリスに発展した Empiricism 哲学の路線に流れこんでいくものと解釈することも可能であろう。オーエン＝功利主義者説は、たとえ無意識であるとしてもこのような可能性を事実としてとらえた考えであろう。しかし、多くの哲学史家が一致して解釈したように、Empiricism の哲学は、supreme Being の絶対的他者性について実践的にも理論的にも消極的姿勢をとるのを常とした。それは、実体に対する経験論的懷疑を媒介として、経験＝実在論に定着していく。これを倫理思想的にみるならば、個人主義的功利思想（ブルジョア市民思想）におちついていくものであり、supreme Being もそのような観点から解釈されるようになっていくであろう。ベンサム風の功利主義はそういうものであつたと考えられる。そこでは、絶対的真理と相対的真理の弁証法的関連の探求は放棄されて、つまるところ相対主義になつていくほかはないのである。

ところでオーエンの実践のなかにはたらいだ思想には、そのような相対主義が圧倒的であり支配的であつたといえるだろうか。一見すると、前述のテーゼからオーエンの不可知論的相対主義がひきだせるように思われるかもしれない。しかしそう思われる側面は、じつは人間の理性的認識のいわば權威を絶対者によつて begründen しようとしたのだ、というように解釈できないだろうか。すなわち人間理性能力の相対的真理はただちに絶対者の絶対的真理であり、絶対的真理は相対的真理として実現するのだ、というのがオーエンの確信であつたといえないだろうか。一方において環境決定論、他方では理性の力の確信。こういう矛盾する考え方がおなじ資格をもつて対立しながらひとつになつていた、まさにここにオーエンから学ぶ点さえあるのだといえる。たしかにマルクスの Feuerbach These III のオーエン批判は、そのかたくなな唯物論の欠陥を指摘した点で含蓄にとんだものである。しかしマルクスはそこで絶対的他者の觀念論的解釈を指示し、これに味方したのではない。それゆえ、オーエンの上記の二要素をいいぐあいに功利主義者オーエンによつてうまく調整させようとするのは、ブルジョアの觀念論的解釈であるというべきである。オーエンにおいては矛盾はそのまま存在しておるのであり、しかもかれはこれを一挙に解決したものとみている。もちろん、あれとこれとを統一する歴史的弁証法的論理がなかつたから、そのどの側面も形而上学的なものにむすびついていく傾向は否定できない。しかしその両側面のゆずることのできない独立性を信じているのもまたオーエンであつたというべきである。それだからこそ、晩年の神秘的になつたといわれるオーエンでも、Metaphysik や Romantik にくずれこんでいかなかつたのではあるまいか。

かれが功利主義者でなかつたことは、前述のテーゼと直結するものとしてつぎのような倫理思想を提示していることからもうかがえるであろう。

「以上の法則およびこれに伴うこのうえなく重要な諸結論をよく知つたならば、万人の心中には、人間的種族のいづく主観的信念や激情および行為のために、ひとつのあたらしい、崇高、純粋な慈愛の精神 *charity* が湧いてくるであろう。そして人びとの信念・激情・行為をして、生きとし生ける万人に対して親切なものにさせないではおらぬのである」

オーエン＝功利主義者説はここに述べられているような思想要素を無視するか、或るいは強引にブルジョア的個人主義に転釈するか、いずれかをするのであろう。或るいは、それと同時に、その甘い *charity* 論をオーエンのなかのとりたたりない感傷としてしりぞけるのであろう。しかしながら、このような *charity* は唯物論的環境決定論とただちにひとつに結びついていることに注意しなくてはならない。このことはブルジョア的個人主義の通俗的常識にはわかりにくいことであるかもしれない。しかしおよそ絶対的他者の弁証法は、オーエンのように（またマルクスのごとく）、徹底的に人間の人間らしい生活を探求したものには、多かれすくなかれ、啓示されてくるものであろう。

もちろん、オーエンの合理的宗教の生み出すこのような倫理思想は形而上学的なものとむすびつくことは否定できないだろう。それはたしかにそのとおりであり、いわばおくれた方面であることはまちがいない。しかし、それはブルジョア功利主義的なものではない。いつてみれば、たぶんに封建的性格をもつた共同体思想であるかもしれない。しかしそうだからといって、これを黙殺し、ばかにすることはできない。その要素は、唯物論に媒介され、実践的に止揚されるかぎり、反ブルジョア的な社会主義的な意味内容をもつものにかえられていくことも可能となる。こういう点に注目するのは意外に重要なことだと思われる。オーエンはしばしばみじめな現代社会をよかつた昔とくらべて論じることをした。その一例として「工場制度の影響にかんする考察」のなかのつぎのような議論に注意してみよう。

「いまから三十年前の昔は、どんな貧乏な親でも、子どもが正規な労働をはじめる年齢として十四才がちょうどいいと考えていました。この親たちの判断は正しいものでした。すなわち子どもは十四才になるまでに、野外の遊戯や運動によつて健康で頑丈な体格の土台をつくっていました。またかならずしもすべての子どもが読書の手ほどきをうけなかつたとしても、家庭生活について、書物よりもずっと有益な知識を教えこまれ、十四才の年頃にはひとつとおり家庭生活のことに通じていました。……その時代には、お互に相手の利益をおもひするような習性が仕込まれていました。そこで、こういう環境のもとで、下層階級の人びとはかなりの楽しさを享受しただけでなく、健康で合理的なスポーツをたのしむ機会も多かつたのです。その結果、かれらは自分のたよっている人びとに対し、つよい心のむすびつきをかんじたのであります。かれらの奉仕はすすんでおこなわれました。お互に義務をはたしているということが当事者を人間的なものとつよいきずなで結びつけ、お互を境遇のちがう友人同志のように考えたのであります。ですから召使のほうが主人よりしつかりした楽しさを享受できるばあいも多かつたとさえいえます」（拙訳前掲書50ページ）

均衡のとれた全面発達の教育理念、相互奉仕、協同精神の尊重されたいい生活が三十年前の社会に存在したかのようにならている。これはおそらく家父長的オーエンのおくれた考えであろう。しかしながら、そこで尊重されているものは、ブルジョア主義とはむすばないで、社会主義的協同へと止揚されていく、つまり高められて保存されることが出来るもの

ではないか。こういう着眼が無視できないことは、たとえばこんにちの新興社会主義国において、もともと反動的なものであつたはずのふるい共同体思想が、プロレタリア独裁の条件のもとでは、一転して社会主義を激励促進する要素にも転化されつつある事情を考えあわせると、想察できるだろう。

以上のように考えてくると、晩年のオーエンの言動が性格形成原理の「退屈な宗教的語調で語られた繰り返しにすぎない」というもつともそんな解釈も、もしそのさいおくれた側面を歴史的体系的なオーエン思想全体のなかで評価していく態度をすてていざとすれば、おいそれと受け容れるわけにはいかない。科学的社会主義の創始者がそのような「退屈で」「神がかりな」オーエンのなかに、真理に対する献身と通俗的打算を越えた精神をもつとも尊敬し、老思想家をあたたくねぎらうようにつとめたということは意味深長である。(John Spargo, Karl Marx P.190, Harvey, op. cit. P.246)。

これに関連して、オーエンの思想を理解するためには、全面的な伝記の研究の大切なことが指摘されねばならない。その理由はといえば、筆者はこういいたい。オーエン＝功利主義者説の論者はもつばら「成功した資本家」からオーエン思想を測定するようであるが、かれの思想と性格の形成の重要な条件として、その出身階級、性格形成過程のおもみを軽視してはならないからだ、ということこれである。

注 Feuerbach These III はつぎのようである。「人間は環境と教育の産物であり、それゆえ人間の変化は環境と教育の変化によつて生み出された結果であるという唯物論的学説は、環境はほかならぬ人間によつて変化させられ、教育者自身が教育されねばならないことをわすれている。だからそういう学説はどうしても社会を二部分に分割し、その一部の人びとは他の一般社会人のうえにそびえたつものとしなくてはならなくなる（たとえば、ロバート・オーエンの場合）。ところで、環境の変化と（人間の行為（人間自身の変化—訳者注）とが分裂しないでひとつになるのは、変革する実践としてのみはじめて把握され、合理的に理解できるものとなる。」

